

黒馬の来る夜

辻 憲男（文学部教授）

奈良の北に、佐保、佐紀、歌姫、秋篠といったゆかしい地名が並んでいる。万葉歌人・坂上郎女（さかのうえのいらつめ）の家は佐保川のほとりにあった。幼くして穂積皇子に嫁ぎ、寵愛を受けたが、わずか数年で死別した。やがて藤原家の貴公子・麻呂から熱心な求愛があった。相手にふさわしく返歌をした。

佐保川の小石踏み渡りぬばたまの黒馬の来夜（くよ）は年にもあらぬか月下に水音がして、黒光りする馬に乗ってあなたが来る夜は、どうか一年中つづいてほしい。さざ波のように絶え間のない恋心。しかし待っても来ない時がある。では板橋を渡して待ちましよう、「汝が来」（ながく＝長く）と思うから。

夏の野の茂みに咲ける姫百合の知らえぬ恋は苦しきものぞ
恋ひ恋ひて逢へる時だに愛しき言（こと）尽くしてよ長くと思はば
「知らえぬ」は人知れぬ。「愛しき」の読みはウツクシキとも、ウルハシキとも。やっと逢えた時だけでも、ありったけのやさしい言葉をかけてくださいね。郎女の歌はいつも満たされぬ思いを内に秘めている。

歌は母から教わった。母は古参の女官で、邑婆（おおば）といった。ある雪の日、病床の皇女に宮中からお見舞いを差し上げることになったが、だれも歌を作れない。邑婆ひとりが、松の枝が地に着くまで降った雪を御覧に入りたいもの、と詠んだ。735年、有馬温泉へ湯治に出かけたが、留守中に、尼・理願がみまかった。新羅から来て、大伴家に親しく寄住していた。郎女は挽歌を詠んで母に知らせた、「…嘆きつつわが泣く涙 有馬山雲居たなびき雨に降りきや」。



「千鳥鳴く佐保の川瀬のさざれ波やむ時もなし我が恋ふらくは」